

# 山と博物館

第33巻 第1号

1988年1月25日

大町山岳博物館



ランタン・リ頂上直下を登る登頂隊員 撮影 福沢 勝幸

## プロローグ

ランタン・リとはチベット語で「牝牛の群がる平原の峰」の意がある。しかし、これはチベット側から見た意であろう。ネパール側はランタン山群最長の氷河の奥に位置し、生活圏からは遠く離れており、人々の眼からは完全に隔離された峰である。また、標高七二〇五mは、ランタン・リルンに次ぐランタン山群第二の高峰であり、山稜は中国チベット自治区との国境をなし、北北西にプレヒマールの稜線が中国領内に分岐し、西面はプレヒマ氷河、北面はダシ氷河の源頭にあたる鋭峰である。

我々は、九〇名のポーターと共に長いキラパンを行ない、人が生活する最奥の地キャンジュンより氷河へ踏み込んだ。氷河を囲む峰々は、それぞれの個性をきわ立って連なり迎えてくれた。長いモレーンを歩き、氷河上の小山を登り降りを繰り返す。そんなことにうんざりし、あと一日でベースキャンプ地という時に、突然に、氷河のうねりの頂点に秀峰ランタン・リが姿を見せる。最後の最後まで隠れ、姿を見せない山に合えた時の感動。写真でしか見たことがなく、この山に合うために何年も準備し、語り合った日々が頭をかすめる。「夢を現実」に合言葉に、とうとう、ここまで来てしまった。青い空というより青黒い空に頂上トライアングルを突き刺すような峰、急峻に落ち込む山稜、ハンギンググレイツシャーを従がえた壁、見る程に険しく高い。「さて登れるであろうか」「来たからには必ず登るんだ」と、心の中で葛藤が始まる。しばし腰をおろし、白い峰を仰視する。すでに、氷河上のキャラバンで真黒に日焼けした岳友の顔を見ると、秘めた決意も顔に、挑戦的な眼で登頂予定ルートを追っている。覚悟を決めるしかない。登頂成功、そのためだけの行動、そして、それが成された時、やっと我々の「夢が現実」になるのである。

(青いケシ同人 丸山嘉康)

# ランタン・リ峰登頂

## 一ノ瀬 雄三

### 計画の背景

山岳同人「青いケシ」は、海外登山に興味を持つ松本周辺の山仲間が集まり、海外登山を主な目的とし発足した山岳会である。今回のランタン・リ登山計画は、一九八五年の春よりスタートし、二年後の一九八七年二月に出発の運びとなった。当計画の具体化は、同年三月の同会々員による約一カ月のランタン谷踏査により、現地の写真・情報を手に入れる中で、本格的に実施に向かっての活動が展開された。八五年四月にはネパール観光省に登山申請書を提出し、九月には正式隊員を決定した。メンバーは隊長・福沢勝幸、副隊長



ランタン氷河B.C.(ベースキャンプ)より望むランタン・リ全景  
(左の稜線が登頂ルートの南西稜) 撮影 福沢勝幸

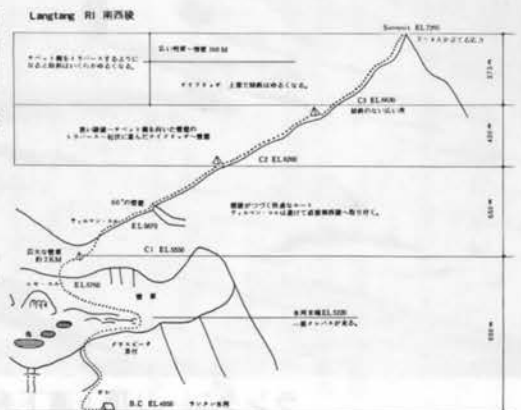
・山本大三、登攀隊長・丸山喜康、マネージャー・一ノ瀬雄三、食糧・丸山敬司、装備・矢口勝義、輸送・山本満の七名、またネパール側よりカミ・ツエリン、ニマ・ウォンチュ、アジワの三名のシェルパが加わり、日本・ネパール合同十名の隊員が決定した。

当初この計画は、秋にランタン・リを登頂し、冬期にランタン・リルンを数名のアルパインスタイルで登るというものであったが、諸々の事情で計画を変更、最終的に八七年春のランタン・リ登頂一本に絞られた。

### 準備

本格的な準備は、八六年二月頃より開始した。まず長野県山岳協会の審議会で推薦状を得るための計画書を作成し、協会に提出。同年九月には、装備・食糧等の物資準備をするための細部計画書を立案した。日本とは勝手が違うため、現地の不自由がないよういろいろなケースを想定し、また過去の遠征隊の資料を参考にしながら、煮詰めていった。近年、アルパインスタイルで短期に攻撃するスタイルが多くなってきたが、我々はじっくり山に向かい、全員登頂を目指すもので、これらの事前準備が大切な作業である。基本的には週一回のミーティングを開催し、夜の十二時頃まで議論をする中で、一つひとつ決めていった。

充分練られた細部計画書ができた段階から、



Langtana 南西稜

物資調達の際に移行した。物資調達の基本的な考えとして、我々は現地調達を中心に考えた。それは昔と違い、カトマンドウに多くの物資が出回っているのと、日本からの輸送コスト、及び最近の円高を考えると、非常にメリットがあるからだ。従って国内調達するものは最少限必要なものみに押えた。さらに秋には福沢隊長・矢口隊長がネパールへ行き、装備の調達、さらに詳しい事情を入手し、装備は完全なものとなっていった。そして八七年一月には隊荷の梱包も終わり、手続を終えてネパールへ発送した。この段階になると頭の中は既にネパールへ飛んでおり、本登山に向けての気持も高まってきた。

八七年二月、いよいよ出発の時だ。二月十日には地元多くの山仲間及び関係者の人々によって盛大に壮行会をしていただいた。壮行会終了後、十四日には先発隊、二十八日には本隊が成田よりネパールに向けて飛び立っていった。この計画が出発するに至るまで約

### 登頂ルート

二年間、四十回にわたるミーティング、準備、それぞれの隊員が職場・家族の理解を得る中で今日まで来た。登山も大変なことであるが、海外遠征の場合、出発前までの準備というのが精神面も含めて非常に大切なものである。何とか準備万端に整えることができた我々は、隊員一人ひとりが意気揚々と出発していった。

### KTMiキャラバン

先発隊の現地準備もトラブルなく順調に進み、本隊と三月一日に合流した時には殆んど準備が終了していた。ネパールメンバーと初顔合わせをし、各関係方面への挨拶まわりを済ませ、三月六日にカトマンドウを出発することにした。異国での調達準備の場合、通常何らかのトラブルにあり、こんなにスムーズにいかないのが常らしいが、福沢隊長がネパール事情通であり、事前の現地調査の実施、ネパールメンバーの好意的な協力により順調な出発となった。

キャラバンはドゥンチュエまではバスをチャーターし、ドゥンチュエで多くのポーターを集めスタートすることにした。隊荷は全部で約二・七トン、ポーターは九〇名程度必要であったが思うように集まらず、やむなく七〇名を一次隊とし、二隊に分けて出発した。気候は温暖で快適、天気も良く、道端には真赤なラリーグラスの花が咲き、気分最高のキャラバンであった。ランタン・リルの登山基地であるキャンジンゴンバに着いたのは三月十日。標高四〇〇〇m程の当地で、我々は高所順化訓練を予定した。標高四千mといってもここまでは雪がなく、これより先は一面の銀世界であった。裸足、女子供のポーターも多く、ここでポーター全員を解雇し、強いポーターを再雇用し、これから先の悪路に備えた。

しかし初日早々、ランタン村で雇ったポーターが日当等でトラブルを起こし、一時は不満を訴えたポーター全員解雇という事態にまで発展した。翌日には向うも折れ、我々の要求が通り再雇用したが、そんな一幕もあった。

キャンジンからランタン氷河最奥部のベースキャンプまでは雪も多く、二十五名の屈強なポーターによるピストン輸送の方式をとった。今年のヒマラヤは例年になく雪が多いということ、ランタン谷でも膝・腰までのラッセルをしながらの荷上で、遅々としたものであった。しかしその後ポーターのトラブルもなく、少しづつではあるが順調に伸び、三月十九日にBC(ベースキャンプ)を四八〇〇m地点に設置し、翌二十日には恒例のBC開きを行い、皆で安全登山と成功を祈念した。我々の目指すランタン・リは眼の前に堂々と聳え、ランタン氷河の最奥部にどっしりと構えていた。やっとここまで来た、さあ登るぞと皆で腹の底にしっかりと力を入れた。ヒマラヤ登山の良さは、このように長い準備、何日もかかるキャラバンを経て、少しづつ気持が醸成され、燃えてくるところにあると思う。長かった今までの日々が、さあつと頭をかすめ、感慨が胸にあふれてくるBC開きであった。

**登山活動**

登山活動は三月二十四日から開始した。C1地点の偵察と荷上が同時に行われた。ランタン・リはネパールと中国(チベット)の国境に横たわっているが、ランタン・リに近づくには五八〇〇mのニセテイルマンのゴルを越えていかなくてはならない。我々はC1をこのニセテイルマンのゴルとテイルマンのゴルの間の五六七〇m地点に設置したが、水平距離が長く、広大な雪原を行くルートであっ



C1(キャンプ1)正面の山はチベットの山々、手前がテイルマン・ゴル 撮影 矢口勝義

た。当初の計画時点からスキーを使うのが最高と考えていた我々は、早速日本から苦労して持ってきたスキーをセッティングし、愛用した。ひざから腰までくるラッセル、翌朝には風によりトレースも消えてしまうというヒマラヤにおいて、スキーは威力を発揮し、我々の登山を苦痛から快適なものにしてくれた。C1の標高は高いが、ここからだ我々の目指す南西稜は目の前であり、登山基地としては最適であった。休養時はBCまで戻ることが、C1が登山活動の中心となるため、しっかりと大テントを設置し、キッチン用の雪洞も掘って居心地を良くした。C1設置と同時にC2へ向けてのルート作業を開始した。目標の南西稜にはテイルマンのゴルより取付くテイルマンのゴルへはスキーで一滑り、そこより幅広い雪稜の登攀となる。さすがに高所は息は苦しく、一步一步呼吸を整えながらの登攀である。C2直下で十m程のアイスフォールを乗越し、C2(六一五〇m)を設置。

すばらしい高度感と眺めに圧倒された。ランタン谷の底を何日も歩いてきた我々にとって、ここからの眺めは最高であった。眼の前に聳えたつしシヤパンマをはじめ、ポロン・リ・リスムといったランタン山々の山々は目前に広がり、遠くを眺めると、マナスル、ピーク29といった山を望むことができて、ここがヒマラヤだといわんばかりの絶景であった。

C2を設置後、荷上げと高所順化をしながら、C3へのルート開拓を開始した。C2までのルートと違い、C3へのルートは氷壁、ナイフエッジの狭い稜と、いきなり難しくなった。両側は氷河の底まで切れ落ち、気の抜けない所である。こういう場所に来ると、登攀の醍醐味というか最高の気分となる。ピッケルとアイゼンで一步一步確実に雪面を捉え、少しずつ進んでいく。傾斜がきついだけに高度がぐんぐん上がる。同時に回りの景色が低くなり、遥か遠くまで雄大な景色を見渡すことができ、ああこれがヒマラヤなんだという実感が湧いてくる。このナイフエッジを越えようと途中大きなゴルがあり、その後急な雪稜を登りつめるとC3である。C3は標高六六七〇mの稜の途中にある傾斜の緩くなった地点へ設置したが、四月五日、我々はC3直下までルート作業をし、設置のメドが立ったところでテントと食料をデポし、一旦下ることにした。その後各隊員がC3直下まで登り、高所順化を行った。登山活動開始以来我々は好天に恵まれ、C3の設置準備まで順調に進めることができた。しかし四月八日から急に天気が下り坂になり、強い風雪



C1-C2間 撮影 矢口勝義

のため全ての行動を中止した。この大雪でC1の二張のテントは完全に雪に埋まってしまい、除雪をしながら好天となる機会を待った。天気はいま少し回復しないが、C3の設置のメドが立っていることと、各隊員の高所順化もある程度順調にしていることから、雪の止んだ時点でC1・C2のメンバーともに全員BCに戻り休養をした。後はアタックのためのチャンス待つのみである。ABCに全員が揃った後、ゆっくり休養しアタックのためのミートイングを済ませ、天候の回復を待った。

数日間の休養の後、四月十四日、第一次アタック隊の一ノ瀬、山本(満)がABCを出発した。これより一日早くウォンチュ、アジワがC3設置のため上部に向かった。第二次アタック隊の福沢隊長、山本副隊長、丸山(敬)は四月十五日ABCを出発した。天候も回復し我々は順調に高度を上げ、四月十六日C3入りした。アタックを翌日に控え、初めてC3の夜を過ごした。

四月十七日、いよいよアタックの日だ。三時に起きゆつくり朝食をとり六時にC3を出



登頂 撮影 山本大三

発した。気温は低いが快晴無風の絶好の登頂日和。ラッキーだ。C3上部はなおバランスの要求されるリッジと雪壁のトラバースが続く。やがて緩斜面の吹きさらしに出る。ネパール側には巨大な雪庇が張り出し、見上げると美しい頂上が迫ってくる。左上気味にチベットの側にトラバースし、そこから一気に山頂を目指し直登した。頂上直下は約五〇度の雪壁で、午前十時四〇分、七二〇五mのランタン・リの山頂に立った。翌四月十八日、第二次登頂隊も強風の中無事登頂した。日本側隊員五名、シェルパ二名、合計七名がランタン・リの登頂に成功した。

全隊員がABCに帰幕したのは四月二〇日。コックのスパをはじめ、BCで待機していた人々が温かく迎えてくれた。胸にジーンと実感が湧いてくる。登頂の喜びを胸に、その夜は久しぶりの御馳走とアルコールで楽しく過ごした。

成功というすばらしい結果を手に入れた我々は、喜びをかみしめながら氷河の谷間から淡い緑の谷間にゆっくりと下山していった。皆それぞれのドラマを胸に残し、今回の遠征にピリオドを打った。

遠征を終えて

日本での登山と比べ、海外遠征は様々な違いがある。特にヒマラヤに於ける登山は高所であるという特殊性も加味され、気軽に登ってくるといわけにはいかない。事前の計画準備段階から合わせると、二年数カ月の月日がかかっている。一部の優れた者にはアルパインスタイルによる短期決戦も可能であるが、それとても周到な準備が必要である。このようなかで、我々のような社会人登山家が計画を立て、実行に移していくには様々な苦労がある。これらを含め、ヒマラヤ登山というのは山登りだけでなく様々な体験を我々に与えてくれ、意義深いものであると思う。また遠征期間中においては、ネパールという国柄、ネパールの人々とその生活に触れることができ、いろいろな面で我々を豊かにしてくれる。今回の遠征は隊員、関係者、ネパールの人々と温かい人々に恵まれ、成功のうちに終わらすことができた。信州の田舎の岳人のチャレンジではあるが、一つのドラマが生まれ、終わって行く。また新たな若者が各の夢を描き苦難を乗り越えて一人でも多く、喜びに到達してもらいたいと期待している。

(青いケシ同人)

博物館だより

資料寄贈ありがとうございます

シロマダラ(ヘビ) 1点

大町市平中綱 大谷正祥  
古地図 33点 武蔵野市西久保 熊井重次  
昭和初期の山岳図書など189点

横浜市泉区 崎川サン子 (敬称略)

※崎川さんにご寄贈いただいた資料に関しましては、整理完了を待って詳しくご紹介する予定です。

※本号内容のランタン・リ登山関係の一部資料を近日中に受入・展示の予定です。  
バックナンバーのお知らせ(2)

次の巻号のバックナンバーがあります。内容は主なものの紹介ですが、ご了承ください。

第10巻第11号(昭和40年11月)  
アメリカの極地研究とその周辺(1)

丸山 晃  
平林照雄

第10巻第12号(昭和40年12月)  
アメリカの極地研究とその周辺(2)

丸山 晃  
平林照雄

第11巻第1号(昭和41年1月)  
アメリカの極地研究とその周辺(3)

丸山 晃  
平林照雄

第11巻第2号(昭和41年2月)  
カラ類の巣箱と生活

三石 紘  
平林照雄

第11巻第9号(昭和41年9月)  
乗鞍山で笹の実を探る

室井 紳  
杉本順一

第11巻第10号(昭和41年10月)  
居谷里湿原の植物

高橋秀男  
荒井好美

第11巻第11号(昭和41年11月)  
再び巣箱の観察について

三石 紘  
後立山夏山衛生バトロールを終えて

白田周三郎

第12巻第3号(昭和42年3月)  
今冬スキー拾い歩記(2)

宮島 久  
横内 齋

第12巻第6号(昭和42年6月)  
スピッツベルゲンの旅(1)

太田昌秀  
宮尾雄雄

信州植物寸景(その五)

横内 齋

バックナンバーの請求方法

右記にご希望のものがありましたら、一部100円でおわけします。巻号と部数を明記のうえ、現金書留か口座振替で「大町山岳博物館宛」ご送金ください。着信次第お送りします。(送料当方負担)品切れの折は最新号でお知らせします。振替の場合、口座番号は長野四一三二九三です。

山と博物館第33巻第1号

発行所 長野県大町市 一九八八年一月二十五日発行  
TEL 262-1111  
印刷所 大町市 山岳博物館  
長野県大町市使町 大糸タイムス印刷部  
大糸タイムス印刷部  
定価 年額 一,二〇〇円(送料共)切手不可  
郵便振替口座番号(長野四一三二九三)